

## 笑いの介入技法の得意な群と苦手な群での構成要素の比較

国立大学法人高知大学医学部附属病院

○岸田 安世（5階東病棟）

特定医療法人仁生会三愛病院

津野 順子

独立行政法人国立病院機構高知病院

小池 純代

高知県・高知市企業団立高知医療センター

西山 由加

特定医療法人仁生会細木ユニティ病院

伊東 美奈

高知赤十字病院

川端 咲恵

高知女子大学看護学部

井上 正隆

key word：コミュニケーション、笑い、笑いの介入技法、ユーモア

### はじめに

看護ケアにおける「笑い」とは、苦痛な体験を超越する手段であり、和ませる癒しの力であると考えられる。今回、笑いの介入技法を得意とする看護師と苦手とする看護師で、笑いの介入技法を構成要素にどのような違いがあるのかを明らかにすることを目的に研究を行った。本研究を通し、「笑いの介入」を個人的なセンスや経験に依存した介入技法とするのではなく、多くの看護師が用いることができる様な手がかりを得る事ができると考える。

### 用語の定義

笑いの介入技法：看護師が患者や家族に対して行う「笑い」を引き出すコミュニケーション技法。本研究では、特定の語句や言い回しによるユーモアの力と言葉のやり取りによるかけあいの力によって構成されるものと定義する。

### 研究方法

1. 研究デザイン：質問紙を用いた実態調査型量的研究
2. 研究対象：A県下4病院の一般病棟（精神・小児科を除く）に勤務している、管理職以外の看護師（准看護師も含む）400名。
3. 調査期間：2008年8月下旬～9月末
4. 質問紙の作成：文献検討を基に構成する要素を抽出、抽出した要素をコード化しネーミング、カテゴリー分類を行い、質問紙を作成した。プレテストを行い質問項目の洗練化を図り、5段階のリッカート尺度を用いた24項目の質問紙を再作成した。
5. 分析方法：質問項目の「周りの笑いを誘うようなコミュニケーションをとるのがそれなりに得意だと思う」のヒストグラムを参考にして、1点以上を【得意な群】、1点未満を【苦手な群】とした。それぞれの群ごとに因子分析（バリマックス法）を用いて分析した。得られた成分を基に、成分行列と各質問項目の意味合いを考慮して、各成分をネーミングし、構成要素を抽出した。
6. 倫理的配慮：文書で研究の要旨、匿名性の保持・研究協力が自由であること、研究不参加の場合でも

不利益を被らないこと、研究結果を学会等で発表することを説明し協力を求めた。質問紙の回答をもって同意とした。

## 結 果

研究に同意の得られた看護師 198 名から回答を得た。

回収率は、49.5%、有効回答率は、86.4%であった。

【得意な群】(n=56)は、6つの成分に分類され、分散の累積のパーセントは68.5%であった。また、【苦手な群】(n=115)は、5つの成分に分類され、分散の累計のパーセントは64.9%であった。

## 考察および結論

### 1. 【得意な群】の「笑いの介入」を構成する要素の抽出

【得意な群】の成分は、6つから構成されており、《要素1：笑いできっかけを作り、患者自身にできると気付かせるケア》、《要素2：辛いことも、笑いで助け、乗り越えるケア》、《要素3：陽気におどけて意表を突くことで、患者の気持ちを明るく変えるケア》、《要素4：褒めはやし、患者の自信につなげ調子を上げ、次につなげるケア》、《要素5：笑いの演技で、患者の気持ちをほぐすケア》、《要素6：愉快的なムード作りで心のゆとりを図るケア》とした。

### 2. 【苦手な群】の「笑いの介入」を構成する要素の抽出

【苦手な群】の成分は、5つから構成されており、《要素1：共感的な姿勢で感情的な部分を刺激し、やる気にさせるケア》、《要素2：患者のマイナスな思いを、明るく前向きに変換させるケア》、《要素3：さりげない心配りで、患者の気持ちを紛らわすケア》、《要素4：発想の転換でやる気を促すケア》、《要素5：患者同士が刺激し合えるような働きかけができるケア》とした。

### 3. 【得意な群】と【苦手な群】の構成要素の比較

【得意な群】と【苦手な群】の抽出された構成要素を質的な側面から分析した。【得意な群】の要素3と【苦手な群】の要素2に注目してみると、それぞれ同じような項目が分類されていた。しかし、【得意な群】は、「質問項目：患者に突拍子なことを投げかけることで笑いに変えている」の因子負荷量が0.820、「質問項目：患者が落ち込んでいる時こそ、ハイテンションで関わり、明るく変えることがある」は0.794と高い特徴があった。このことから、患者の気持ちを明るく変えるために、【苦手な群】は、陰性感情をそのまま受け取り明るく変えているのに対し、【得意な群】は、そのまま対応するのではなく、陽気におどけて意表を突くという複雑な技法を駆使し、より患者が和めるようなコミュニケーションを図ろうとしていることがわかった。

〔平成20年度 高知県看護協会 エキスパート育成研修による研究  
平成21年7月18・19日 第40回日本看護学会 看護総合(京都)にて発表〕